1990年9月5日発行（毎月1回5日発行）1984年2月10日第三種郵便物認可 ISSN 0286−4479

POLAND MONTHLY ／ BIULETYN POLSKI

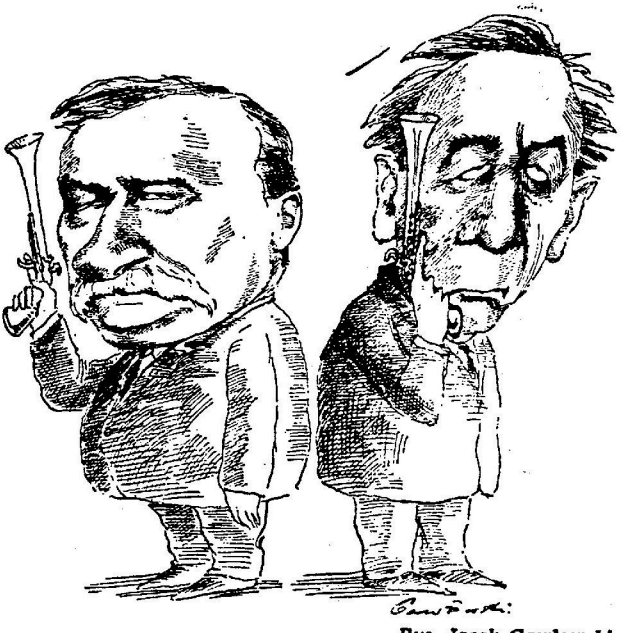
ポーランド月報

1990年
8/9月号
（通巻101/102号）
400円

「大統領にはなりたくない……しかし、ならざるをえまい」

レフ・ワレサとのインタビュー

「連帯」市民委員会に何がおこったか



Rys. Jacek Gawłowski

☆☆ ポーランド月報 1990年8／9月号（通巻101／102号） 目次 ☆☆

新生ポーランドのために自制を……3
マゾヴィエツキ首相の国会演説（要旨） 1990年7月5日

「大統領にはなりたくない……しかし、ならざるをえまい」……5
レフ・ワレサのインタビュー

「連帯」市民委員会に何がおこったか……14
「改革の加速化」をめぐって

「カティンの森」日本公開に向けて……22
兼岡 敏二（ポーランド文化センター）

ポーランド日誌 1990年5月17日～6月20日……2/23

ポーランド日誌

1990年5月18日～6月20日

5月18日 下院、ワルシャワ自治法を可決。

5月19日 スウプスクで5月10日からハンストをしている同地鉄道員支援の鉄道スト（以下、スト関係は本誌7月号に詳報）。

5月21日 政府はポーランド北部一帯の鉄道ストを、労組の組織構造によらない違法ストと発表。「連帯」鉄道部門と『ガゼタ・ヴィボルチャ』はスト中止を呼びかけ。●環境保護のためスウェーデンからポーランドに4500万ドルが贈られる。●ダイハツ工業、ポーランド進出を事実上断念と発表。

5月22日 政府、鉄道ストへの対応を協議。●「連帯」全国委、山猫ストを非難し、ストの理由となった諸要因は理解するが、このストは「連帯」が組織したものではなく支持もしない、と声明。

5月24日 下院、政党法を可決。政党は憲法審判所に登録することで法的地位を得られる。

5月27日 鉄道ストは依然続く。●ポーランド初の完全自由選挙である統一地方選が行われる。約5万2000の地方議員の議席をめぐり、約1000の政党、組織、団体が候補を擁立。投票率は42.13%。●政府、軍政治アカデミーを廃止し国防アカデミーと軍事技術大学を創設する決定。

5月28日 ワレサの2度目のスウプスク訪問の後、鉄道ストが中止される。●マゾヴィエツキ首相、2日間の予定でフランス公式訪問。●ステルマフ農務次官、政府農業政策の一般方針を説明。国営農場は小規模単位に分割され、協同組合経営に移されるか売却される。肥料補助金は漸進的に廃止へ向かう計画。

5月29日 27日の選挙の結果、各地で「連帯」系市民委員会が圧勝。ワルシャワで344議席中303、グダンスクで60議席中59、クラクフで75議席中72など。旧統一労働者党が改組した「社会民主主義」（社民党）はワルシャワで15議席獲得したものの各地で議席ゼロに終わる。クラクフでは独立ポーランド連盟（KPN）が3議席。●地方選と同日にグダンスク地域で行われたジャルノヴィエツ原発建設に関する住民投票では、投票者の81.6%が反対、13.9%が賛成。●フランス政府、ポーランドへの新しい援助パッケージ（債務12億ドルの返済繰り延べを含む）に同意。●大学生の軍事教練が今年から一部、来年以降は全面的に廃止。

5月31日 クーロン労相、鉄道労働者の賃上げ要求を認めることは他のストの引き金となり、国の利益に反する、と述べる。●マゾフシェ地区「連帯」幹部会は鉄道ストに関し、「社会の自制、各地の『連帯』構造の成熟した対応、レフ・ワレサの尽力」を称賛し、ストに決然たる姿勢で臨んだ政府をも評価する一方、鉄

【23頁へ続く】

新生ポーランドのために自制を

マゾヴィエツキ首相の国会演説（要旨）　1990年7月5日

A Plea for Self-control:Excerpts from Mazowiecki's Speech to the Sejm, July 5, 1990
Gazeta International, No.20, July 19, 1990

1年前、ポーランドは中部ヨーロッパで初めて非共産党政府による権力の平和的掌握の先例を開いた。次いでわれわれは、全体主義から民主主義への平和的な、だが首尾一貫した移行の先例を作った。ポーランド社会は混乱と暴力を免れることができた。このことでポーランドは全世界の信頼をかちとった。修復の最も困難な分野、つまり経済の再建に向けたわれわれの努力についても同じである。

政治生活の分野では、祖国と政府に対する責任感の希薄化が進んでいる。ここ国会においてさえ、目的意識的な論争に代って野蛮な闘争の言葉が幅をきかせている。議論の力によって批判されるべき反対意見の持主が、粉砕されるべき敵であるかのように扱われている。

私は自制を呼びかけたい。ポーランドは、知恵と平和、法の順守を必要としている。

現在進行中の変化のためにポーランド社会がいかに高価な代償を払いつつあるかは、われわれすべてが知っている。しかし、民主主義ポーランドへと至る道はほかにには絶対にないのだ。

党の国家は全市民の国家に変わった。責任ある地位や公共生活のすべての部署に就く人間の交替が進んでいる。これまでになかった合意と市民的規律のおかげで、この過程は暴力を伴わずに実現されようとしている。これまで多年にわたって法律を侵犯してきた人々も含めて、個々人の人権が全面的に尊重されている。

法とやり方が重要だ

未来を築く――共産主義的全体主義の廃虚の上に――さいのそのやり方がきわめて重要である。相互の憎悪をかきたてるがままにまかせるのか、それとも自由ポーランドの中にすべての人々に機会と場所を提供しようとしているのか？　われわれは復讐の政策には絶対反対である。

われわれは旧体制の残滓をすべて拒否する。将来もそうである。だがこれを法の枠内で行おうとする。祖国の現状に対して責任を負うべき人間から、その地位と責任、社会的威信を民主主義の手続に従って取り上げることが必要である。近くわが社会は、新しい国会に自らの代表を民主的に選ぶ機会を持つことだろう。

自由市場経済の代償

この6カ月間、われわれは市場経済への移行のプログラムを実施してきた。この過程で生産と生活水準の低下という高価な、しかし不可避的な代償を払わねばならなかった。だがおぼえておこう。この代償は一時的なものにすぎないが、積極的な成果は永続的なものなのだ。

自由市場とインフレなき経済への移行の政策は放棄されてはならず、私の率いる政府がこれを放棄することはない。これを放棄すれば、外国からの援助は得られず、対外債務を減らす機会は失われる。今まさに、そのための交渉を始めようとしているのに。

外国の投資家はポーランドに非常に深い関心を抱いている。だが同時に、政治的混乱の兆しから懸念も深めてもいる。

経済政策の調整

政府は経済政策の基本を変更するつもりはないが、今年後半は強力な供給の実現のために政策の調整を行う予定である。

政府は、住宅建設や社会福祉、保健衛生、農業（とくにミルク生産）の促進のために地方政府に対して、150億ズロチの追加援助を行う。

超過賃金税の緩和措置を準備中である。利益を上げている企業は、税支払いの増加を伴わずに賃上げを実施できるようになる。これによって、実質平均賃金の下落はとまり、さらには上昇に転じて、国家歳入の増大にもつながる。

近い将来政府は、外国資本の投資条件――利潤送金も含めて――の自由化計画を発表する。

民営化は核心的な問題である。政府は国会が民営化法を早急に可決するよう望む〔7月13日に可決された〕。わが国の企業はできるかぎり早く真の所有者をもたなければならない。

農民たちへ

農業市場は需要主導となっており、いかなる価格でも製品が売れるという状況にはない。経費の削減が必要である。

私は農民を軽視するものではない。政府も同じである。他の諸国と同じ方法で農業を保護したいと思う。政府の力の範囲内で農業を援助する。

他の社会諸階層も多くの緊急の要求をもっている。国会の農民代表の理解を求めたい。お互いに争うのはやめよう。平和的に、実際的に話し合おう。われわれは敵同士ではないのだから。

今日のポーランドには、代替的なプログラムを提起し、政治的結社を作り、意見を自由に表現する可能性が存在する。政府の政策に抗議の声を上げることも可能である。しかし、公道が封鎖され、政府の建物が占拠されるような状況を、民主主義国家は黙認できない。それは、公共生活を混乱させる最も確実な方法であり、それは遅かれ早かれ新たな独裁体制をもたらすだろう。

選挙の繰り上げ

権力をめざして闘う者なら誰でも、最大の責任をもって対処しなければならない3つの問題が存在する。国の安全保障、対外政策、そして経済再建の戦略である。この3つの分野におけるこれまでの成果を危うくすること誰にも許されない。

私は、選挙による判定の時が近づいていると信じる。その期日は国会によって決定されるが、国会は、祖国の善、国民の意志、そして民主主義の尊重だけを考えてこの期日を決めるべきである。来年春よりも早い時期も考慮されるべきだと思う。数カ月間もの時間を選挙運動に費やす余裕はわれわれにはない。

来るべきこの選挙において、私はポーランドに関するこの考え方、この政治哲学――これは私の政府が組織された時に国会によって受け入れられたものである――を防衛したいと思う。それぞれの過去や経歴とは無関係に万人が法の下に平等である国家、キリスト教の精神と伝統によって育まれた、それでいて寛容かついかなる形態の差別からも自由な国家、こうしたポーランドに関する考え方は私の友人たちの多くも共有するものだ。

〔訳：水谷　驍〕

「大統領にはなりたくない……しかし、ならざるをえまい」

――レフ・ワレサのインタビュー――

Prezydentem nie chcę zostać……Będę musiał zostać, z Lechem Wałęsą rozmawia Anna Bikont
Gazeta Wyborcza, 20 czerwca 90

――あなたなら国会議員にも、それにゲレメクの代わりにＯＫＰ〔議会市民クラブ〕の委員長にもなれた。ヤルゼルスキの代わりに大統領にも、マゾヴィエツキの代わりに首相にだって。もしあなたがこれらの役割のどれかに就くことを決心していたらポーランドはもっとよくなっていた、そう考えたことは？

ワレサ　私はゲームを投げたことはない。ただポジションを譲っただけだ。ルバンスキの10番はマゾヴィエツキに、ガドーハの11番はゲレメクに〔ルバンスキとガドーハは70年代のサッカーのポーランド・ナショナルチームメンバー〕。

彼らは私に逆らってボールをキープするべきではない。私がパスしたボールなのだから。しかし彼らはパスすべき相手をひとつひとつ決めておきたいというのだ。――ブロネクさん〔ブロニスワフ・ゲレメク〕にタデクさん〔タデウシュ・マゾヴィエツキ〕に、と。だから私は彼らに渡したわけだ。

私がゲームをしたがらないと彼らは言う。私はゲームをしてきたし、今でもしている、それが彼らの気に入ろうと入るまいと。

時にはひどいパスをやらかすことだってある。そんなときにはこう言えばいいのだ――「ナイス・パス。だけど危ないときにはブロックしたり、右へ回したり、外へ出したりしなけりゃ」。ところが、すぐこう言う――「ひどいパスだ。だいなしじゃないか。コーチがいないからなあ」。実はいいパスなのだ、ところが受ける方がヘディングすべきところなのに足で蹴る、そこで審判のホイッスル、私のパスのせいではない、キックがいけないのだ。

――あなたはパスをする。しかしあなたはフィールドにはいない。

ワレサ　ボールを受けてくれたら、もめごともなかっただろう。私はソ連軍撤退というボールを渡した。マゾヴィエツキ氏は用意ができていない。彼はこう言うべきだったのだ――「ワレサでさえソ連軍の撤退が必要だと言っている。われわれはドイツ問題があることを理解している、だから撤退はできないが、この問題が存在することは知っている」。そう言っておけば誰も損はしないだろう。ところが連中が言うには――「馬鹿げた答えだ、ごたごたを惹き起こして、無責任だ」となる。そこでもめごとが始まる、何しろ私もこう言わざるを得なくなるからだ――「私がまずいパスをしたわけじゃない、君が受け損なっただけだ、誰にも損をさせまいとしたのに」。

斧を持った大統領

――ポーランドに必要なのは、ブッシュのような強い権力を持った大統領だろうか、それともヴァイツゼッカー〔西独大統領〕のようにモラルの権威としての大統領だろうか？

ワレサ　すべてが回り出した時には、大統領が統治するべきなのか、それとも儀礼的な役割を果たすべきなのかをよく考え、それを基本にして選択を行うべきだろう。

体制を変えようとしている今、必要なのは斧を持った大統領だ――断固としていて、厳しく、率直で、空騒ぎせず、民主主義を妨げない、しかもすぐさま空白を埋めることのできる大統領。人びとが体制の変化を悪用したり、盗みを働くのを見れば、彼は政令を出す。それは国会で解決案ができるまでの期間、重要な役割を果たす。私にそのような権限を持たせてくれれば、ポーランドの半分を救ってみせる。なぜなら、民主主義において

は何もかもまず議論にかけ、手際よく片づけるということはしないものだから。

――あなたは大統領についてまるで自分自身のことのように言っているが。

ワレサ　あたらずとも遠からずだ。今の状況に必要な素質は、素早く、鋭敏で、抜け目のないディフェンスであり、民主主義と政府に敵対するものでは決してない。

――あなたは4月にオランダの雑誌『エルゼフィエル』とのインタビューでこう言っている――「もしドイツが統一後、ヨーロッパに混乱をもたらしたら、ドイツをヨーロッパの地図から拭い去らねばならないだろう」。あなたは口が悪い。『トリブナ・ルド』からはもう逃れられない。これは大統領にとっては名誉を傷つけるものだ。

ワレサ　それは記者によってすっかりねじ曲げられている。問題は別のところにある。もしストに加わっている人たちと口論するのだったら自分流にやればいい。しかしその後、私はスト参加者の口喧嘩の口調を外交官の口調にかえる。私のその場に合ったすばらしい言葉（私はそう思うのだが）は、違った状況に出合うと、私がその状況に適さないことを立証する。つまり、記者会見というのは大統領の外交的行動とは違うものなのだ。

同じように、私はあなたがたの新聞『ガゼタ・ヴィボルチャ』を蹴とばすつもりは毛頭ない。ただ場違いなだけだ。私が大統領たちと話すことができないという批判？　私は話をしたことがあるし、自分の方から話そうとしている。

――結局、大統領職についてはどうなのか。

ワレサ　私は大統領になりたくないのだが、ならざるをえまい。

秩序か嵐か

ところでいま私が作り出そうとしているのは秩序、つまりは嵐だ。上部での戦争だ。この戦争を私は勝ち抜きたいと思っている。将軍たちが私の味方になり、もう一度、多元主義への道に戻るために。ものごとはわかりやすくなくてはならない。このわかりやすさのために私は――大会の賛同を得て――「連帯」日刊新聞を創刊した。

ただ、ゲームを始めるのが早すぎたかどうかはわからない。しかし私はどうしようもなく権力独占がこわい――私の仲間たちの独占ではない、その後継者たちの独占だ――またしても私が刑務所に入るのではないか、いや、たぶん私の子どもたちか。なぜなら権力独占はいつもそういう結末になるのだから。

選択の余地はない。もう1回、試してみる。そして今度は目印をつけたカードから目を離さない。

――クーデタを計画しているのか？

ワレサ　正しい選挙を実現するだけだ。いかさまはすべて暴いてやる。いんちきは絶対に許さない、友人を犠牲にしても。

――勝てるのか？

ワレサ　負けるかもしれない、しかしポーランドの改革問題にとっては勝利だ。

――選挙日の変更案が3つ出された。1つはOKPのゲレメク案で、1991年3月3日以前。2つ目はナイデル〔市民委員会委員長〕案で、秋。3つ目は中央同盟案で、まず現在の国会議員により大統領を選出し、その後新たに国会議員選挙をする。国のためにはどの案がいいと思うか？

ワレサ　まず、第1案がゲレメクのものだというのは間違っている。そんな言い方をしないでほしい。共産党解散の時期を利用しないという手はない。すぐに選挙を告示すべきだ、費用は関係ない。

――それはつまり、ただちに、できるだけ早い選挙を、という意味なのか？

ワレサ　今となっては無意味な質問だ、何しろ期限がもうすぐそこに迫っているのだから。用意したシナリオを必要もないのに変えることはない。

当時、私は友人たちが事を急いでくれると思っていた。どんな経済的効果も期待できなかったし、必要なのは権力執行への社会の広範な参加の保証だった。参加を通してこそ権力の受け入れが可能になるのだから。

――地方自治体選挙が社会的基盤の拡大と人びとの積極性の喚起の助けになった。

ワレサ　ところがわれわれは、今の政府は最良なのだから黙って座って待っていろ、そう言った

のだ。その間に参加者が少なくなりすぎて危険な荷物が山と残された。仲間たちは私が作ったシナリオのすじを守ろうとして考えの基本を誤った。

国会内の統一労働者党員は恐れているし、本気になっている――私にはわかる――しかし、国会で多数を占める彼らは社会における多数派ではないし、後方支援もない。そして前の時代の形見が人びとをいらだたせる。アルバニアがいい例だ。

私にも過ちはあった、仲間たちのすばらしさを当てにしていたことだ。彼らの論法はこうだ――われわれは申し分なくやっている、経済や生活環境についても気を配っている、と。しかし地獄への道は善意で舗装されているとはよく言われることだ。われわれの側には、最良の位置に最良の人物がいる、しかしそれは政治構造の代わりにはならない。彼らは忘れている、彼らがいなくなれば他の人びとがやって来るということを。彼らはもうそれほどすばらしくも、清らかでも、愛国的でもないのだ。

統一労働者党に対する「連帯」

――誰が国会議員候補者を立てるのか？

ワレサ　大変な混乱になるだろう、150もの政党ができるのだ。われわれはゆっくりとヨーロッパのやり方に順応してゆくだろう、そして党も同じ名前――社会党、キリスト教民主党、労働党――になればいちばんいい。

――それらの名前は西側ではしばしばすっかり習慣的なものになっている。われわれの方では、急ごしらえの諸党派（地方自治体選挙の結果からするとたいした支持は受けていないが）と、中央同盟を持つことになる。

ワレサ　なんとまあ幼稚な！　あなたは政党にとって風向きが悪いと思っている。では私の方から質問しよう、われわれは助けになっているのか、それとも邪魔になっているのか？　お偉方連中は確かに困惑している。それはわれわれが嘲笑し、われわれの意志を押しつけるからだ、われわれの方が強いからだ。

――誰が、どうやって邪魔をしているのか？

ワレサ　「連帯」のロゴマークが市民委員会に使われていることだ。国会議員を鞄に入れて運んでくることだ。私はそれをきっちりと改めさせるつもりだ。議員の質が下がるかもしれない。だが、少なくとも地元の住民の中から選ばれるのだ。どうかお願いだから、ワルシャワの外へ移ろうなんて考えないでほしい。

――あなたの考えでは、選挙前にどのような新しいグループが登場してくるのだろう。

ワレサ　ゲレメクとミフニクは経済問題が一番重要だと考え、われわれみんなが一緒になってポーランドの貧困に立ち向かいたいと思っている。では一緒に進みましょう。ただしゲレメクは教授として、ワレサは電気工として、そしてアダム〔ミフニク〕は編集者として。各自が自分自身の旗を掲げて行動する、という約束事の上で私は言っている。

人によってはこれが我慢できず、「中央＝左翼」的脱線があると私は思う。それにもかかわらず「一緒に」は勝利するだろう。なぜなら左翼は左翼になれないから。左翼は、「連帯」の傘の下に入らない限り敗北するだろうが、負けるのはいやだからだ。

【訳注】中央＝左翼：1929年秋、国会の中央席と左翼席を占めていたＰＰＳ（社会党）、ＰＳＬ（人民党）、『独立』、ＰＳＬピアスト派、ＮＰＲ（労働党）、農民党、キリスト教民主主義が国会内民主主義を守るという名目で結んだ連合形態。

――「中央＝左翼」、それが、あなたの考えによると、ゲレメクやミフニクが設立するであろう政党なのか。

ワレサ　そう、中央で、少し左寄り。どうして彼らはそのような運動を早く作らないのだろう？

彼らは国民統一戦線の方が好みで、その行間に「連帯」が読みとれる。あなたの考えは？

――今のは左翼と右翼の間での分裂ではないと思うし、そもそも不自然な分裂だ。

ワレサ　そのような分裂はわれわれが望んでいないからだ。でも、もしわれわれがそれを望んだら？

――私は望まない、左翼にも右翼にも共感はない。共感できるのは、「連帯」の理念が親しんでいるポーランドのあるべき姿、寛容で、開かれた、トゥロヴィチ氏〔『ティゴドニク・ポフシェフヌィ』編集長〕の描いたような、そんなポーランド。

ワレサ　しかしそれはこうも言い表せる――中央＝左翼、右寄り中央、左寄り中央、と。なぜわれわれが国民統一戦線〔旧体制下の翼賛組織〕にならなければいけない？　どうして統一労働者党的「連帯」になる必要がある？　われわれは貧民の「連帯」で結構、ただし、それは何かを覆い隠すようなものであってはならない。自分の名前は自分でつけよう。共通のスローガンの下に結集しよう。私はその別の側に結集する。

――あなたのカリスマ性は、あなたが分裂を超えた存在だということから出ている。最近は自分のことを「中央＝右翼」と称しているが。

ワレサ　それが私の性分に合っている。しかしそれは何よりもまず分裂の呼びかけだ。物事を隠そうとする人間には、私は反対する。

誰の委員会なのか

――ヴエツ追放に見られるように、多元主義の追求にあなたはまわり道をするというよりもあまり急ぎすぎたのではないか。あなたは、地方の委員会が独自に決定を下せるよう、市民委員会の解散を提案すべきだったのではないか。

ワレサ　ヴエツは委員会を解散させ、地方委員会を自分とゲレメクの影響下に置こうとしたのだ。

――地方委員会の一部――グダンスク県とエルブロンク県　は中央同盟に加わっている。政府とＯＫＰの後方基地と自認している地方委員会の一部はヴエツ支持のテレックスを送ってきた。もしかすると地方委員会は自然に分裂するかもしれない。

ワレサ　しかしその結末は？　ヴエツとゲレメクが委員会を持ち、私のはなくなる？　そうなったら、私は大きな反体制運動をつくり出し、集められるだけのものをかき集めるだろう。

――あなたはヴエツは脅威にならないと言われた。それではいったい何を恐れるのか。

ワレサ　怖いのは牙を隠した独裁だ。

――委員会は誰に奉仕すべきなのか？　もう１つの国会になるべきなのか？　将来の選挙に備えるべきなのか？

ワレサ　ポーランドが新しい体制へと移行するのはきわめて難しい。争いなく、納得づくでこれを実現するためには、すべてのグループに新会員選出の原則を認めさせる市民委員会が必要になる。

委員会は広範な論戦の場となるべきであり、そこでは様々な立場が共同で提案（決定ではなく）を作り、民主ポーランドの仮の地図を描くようになるべきだろう。

私ならそんな大仕事にとりかかれる。レフ・ワレサはレフ・ワレサであり、ただ１人のノーベル賞受賞者でもある。だからポーランドに忠実に仕事にかかれるのだ。

――４月のある記者会見であなたはこう言っている――「軽く圧力をかけて、『連帯』の隣に市民委員会のようなものを作ってみる、ただしそれは政治に取り組むもので、１つはキリスト教民主党的なもの、もう１つは左翼だ」。この発言は今も有効なのか。

ワレサ　もうすぐ左翼が、クラクフかワルシャ

ワに出現するだろう。

――あなたは『ティゴドニク・ポフシェフヌィ』の編集長をしつこく左翼呼ばわりしているが？

ワレサ　その通り、彼は左翼だ、もっとも、彼らは認めようとしないが。

――クラクフのイニシアティブ、イエジ・トゥロヴィチが開いた会合〔6月10日、市民委員会をマゾヴィエツキ政府の与党に改編することの是非が議論された〕をあなたはどう判断するか。

ワレサ　ゲレメクとミフニクがそのことで動くだろう、しかし彼らはそれに加わらないと思う。すばらしい考えじゃないか、どう思う？　私に選択の余地はない。私の攻撃のあとで、誰がより多くの人間を集められるか結果が楽しみだ。彼らは自分自身を慰めるはめになるだろう。彼らはたいした役者だ、しかし今の時代には合っていない。行動には原則が必要だということを彼らに思い出してもらいたい。

――ここでは原則は踏みにじられている、原則はどこにあるのか？

ワレサ　第1回の会合は市民委員会が開かれる前日に行われた。どういうことだ？　私は招かれなかった。それに私は、彼らが指名した秘書を雇わなければならない。まったく、なぜそうなのだ？　たぶん私がワルシャワのグループに属していないからだろうが。

私はチャンスの利用にかけてはなかなかのものだが、それでもチャンスにはよく不意打ちをくらう。彼らはチャンスを利用する能力がない。キシチャクが首相になっていたらどうだ？　マゾヴィエツキは、「連帯」からは首相は出すべきではないと書いていたんだ。

偉大なる紳士諸君に尋ねる

私は例の偉大なる紳士諸君に尋ねてみた。みなさんにとって一番重要だった瞬間は？　何かの宣言を書き上げたときとか、規約の条項を作り上げた時、あなたはそう思ったかもしれないが、実は1980年のあるときだったのだ。その時、ボルセヴィチやグヴィアズダたちは、マゾヴィエツキとゲレメクには造船所側からお礼を言い、支持の手紙

© Otto Axer

を受け取ってからワルシャワへ帰ってもらうべきだと判断した。私はそれに賛成せず、その時から私の独裁が始まった。

もし私があの時ああしなかったなら、マゾヴィエツキ氏は今も『ヴィェンシ』を書き続けていたろうし、ゲレメクも今のゲレメクではなかったろう。私の独裁主義のおかげで、幹部会の議決なしで、組合執行部にボントコフスキとグルシェツキが加わった。これらの要素が「連帯」をつくり上げたのだ。それはしかし民主的ではなかった。民主主義は傷つけられた。なにしろ造船所でインテリと言えば、それは職長や班長のことであって、それは給料のごまかしやなんかと同じ意味だった。そんなところが当時の社会意識であり、私はそれに逆らってつくり上げたのだ。

円卓会議の時の一番重要な瞬間は私がこう言った時だ――「クーロンとミフニクは私と一緒にテーブルにつく、さもなければ円卓会議はない」。会議は数週間延期された。しかし、かつてはプロパガンダのたわ言を信じていた人たちのすべてが、この時は2人のことを、悪魔なんかではなく、感じの良い、すばらしい人間と見るようになって

いた。私は最高にすばらしい政治家の意見に逆らってそれをやり通した――マゾヴィエツキとゲレメクは早くも仲間を見捨てようとしていたのだ。彼らには政治のセンスがない。

最近のストライキ〔スウプスクの鉄道員スト〕は私の見事なサーブ(誰もそう思ってくれないが)の例だ。私はスウプスクに出かけていって、全員からストを終わらせるという署名をもらった。その時1人の男がやって来て私に、ハンスト中のある鉄道員――チェスワフ氏と言った――が病院にいるが、彼は自殺しようとしていると言う。もうひとりやって来て、スウプスクは従わないという。そこで私は、私がここにはいないつもりでやってくれと言った。私はこの2つの問題を処理できた、しかし他の人にまかせたのだ。

1時間待ち、2時間待った。政府からは何もない。ボールは渡ったままだった。とにかくこの2つの問題では――私はそれを公式ルートに乗せた――勝てそうだった。このすばらしいチャンスは利用されなかった。私はもう1度戻らざるをえなくなり、ストは終結した。

その時に聞いたところでは、いずれにせよストは終わっていたということだった。合意はなかった。私が野心があって乗り出し、得点を挙げた、他の人たちが点を失った、そう言われた。

ストライキは終わらなかったかもしれないのだ。なぜなら、指導部全体がスト終結に反対していたのだ。最も重要なのは、鉄道員たちが道義的に敗北していたならばストはやめられなかったということだ。いったい誰にこれがわかる？

私がこう言うと、人は私が大統領になりたがっていると言う。さらに、今私の評判が落ちかかっているので挽回にやっきになっていると言う。誰のせいで私が非難されるのか？　政府だ、国会だ、あの連中のせいだ――私自身のせいではない。

造船所〔グダンスク〕は何回か立ち上がり、抗議しようとした。2回、私のために手押し車が用意された〔手押し車に乗せて外へ放り出すという意〕。1回目はクッション付きだった、まだそれほどひどくはなかった。しかし2回目はクッションもなかった。それは私の仲間たちが期待に添えなかったからだ、私の責任ではない。

――そうは言い切れない。なにしろ、マゾヴィエツキは毎月少しずつ人気を落としているが、それにしてもあなたほどではないのだから。

ワレサ　もし私が自分を大事にして、1年に1回しか人前に出ないようにしていたら、人気も落ちなかったろう。ところが私は仕事で自分を人前にさらす――ストの火消し役はやるし、毎週記者会見もやる。じっとしていろ、何もするな、そうすればもっと評判はよくなる！

なぜ私は好かれないのだ、手紙が私のところにはよく来る――年金が少ない、給料が安い、と言って。失業のおかげで私の人気は落ちる。人は私をスーパー政府だと思っている。しかし私は市民委員会の書記さえ交代させることができないのだ。

私はＯＫＰには加わらないし、その引き回しもしない。彼らのＯＫＰは好きじゃない、あれは非民主的だ。ところが彼らの方は私の市民委員会をほしがっている。やり方が非民主的だ。私は正しいだろう？

――いや。

ワレサ　それは残念だ。そのうちにわかる。ＯＫＰは市民委員会を乗っ取ろうとしているのだ。

――ヘンリク・ヴェツは市民委員会によって書記に選出された。ＯＫＰによってではない。

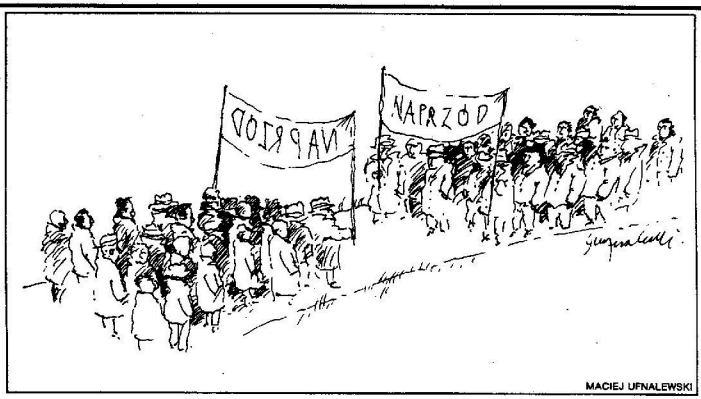
ワレサ　彼は私の提案で選出された。とにかく市民委員会は私の要請で招集される、いつでも私は招集状に署名している。

私が設立した財団についてもその通り。それを招集することはできる、しかしその後、何も発言できない。誰が誰を信用していないのか？　これではマフィアの暗闘だ。片肺の民主主義。私は半人前の議長　　任命はできる、しかし解任はできない。いったい誰がこんなお膳立てをしたのか？　仲間たちだ。そうしておいて彼らは私に文句を言ってくる。

誰のための「連帯」か？

――私にも文句がある、あなたはうちの編集長を解任しようとした。

ワレサ　しかし私にも言い分がある。会社が設立された。



――その会社が『ガゼタ・ヴィボルチャ』を創刊号から発行している。そのことは第1面に出ている。

ワレサ　私がアダム〔ミフニク〕を会社に送りこんだなんて、まったく知らなかった。新聞記者によく聞かれるんだ、私がどんな会社にいるのかとね。どうやら彼らは、私が「アゴラ」〔『ガゼタ・ヴィボルチャ』を発行している出版社〕で稼いでいると思っているらしい。

ミオドヴィチは自分のキオスクに「連帯」と名付けたが、それもいい、彼は「連帯」の中にいたのだから。

――『ガゼタ・ヴィボルチャ』のことを話している時にあなたはミオドヴィチのことを言った。あなたはわれわれを侮辱しようとした、私はそう理解する。実際、われわれには不愉快だ。

ワレサ　どんな違いがある？　私は「連帯」の名を『ガゼタ・ヴィボルチャ』から取り上げ、しまいこんでおきたい。それは共産主義体制との闘いの旗印だった、君らはそれを汚そうとしている。それは次の世代のためにしまっておき、今は違う旗印を掲げて仕事に向かおう。

――『週刊連帯』はその闘いの旗印を掲げなければならないのか？　ヤロスワフ・カチンスキを編集長に任命した時あなたは、組合機関紙をマゾヴィエツキの後方基地にしておくわけにはいかないので人事異動が必要だ、『週刊連帯』は優れて組合的でなければならないといった。『週刊連帯』はあなたの後方基地なのか、それは組合路線を守っていると考えるのか？

ワレサ　『週刊連帯』は完全に自立している。それが私と同じように多元主義と民主主義を拡大させようとしているのは喜ばしいことだ。われわれは黙っていてもわかりあえるし、それが私の気に入っている。運悪く組合関係の記事が少なすぎるときもあるが、『週刊連帯』は追求し、えぐり出す、私はそれが進める闘い、それが追い求めるものを私自身の闘いであり追い求めるものであると考える。追い求めるときには間違いはつきものだ、道筋を知らないのだから。

――おそらく『週刊連帯』の投稿者たちは全員、フレデリック・フォーサイスを除いて、中央同盟に加わっているだろう。このことは「連帯」機関紙の役割とどう結びつけるべきなのか？

ワレサ　今、あなたの座っているその場所には、ＯＫＰからも多くの人びとが加入登録のためにやってきて座った。

国民の指導者か、それとも１集団の指導者か？

――あなたは中央同盟の重要な切り札だ。あなたを早く大統領にしたがっている人もいれば、マゾヴィエツキに賛成し、バルツェロヴィチの計画に同意する人びともいる。全国民の指導者になる

代わりに、あなたは非公式な形で1集団の指導者になっている。中央同盟にとっては名誉かもしれない、しかしあなたにとってはどうなるのか？

ワレサ　あなたが代表している人びとの考え方によれば、お気の毒ということになるだろう。しかしポーランドという観点からすれば――そうではない。私はこの改革の肥やしなのだ。

もし私が懸命になって出世を追い求めているということが本当だったら、私は決してミフニクやヴェツを相手に闘うことはなかったろう。このグループの中で合意を求め、私を助けてくれるように手なづけていただろう。私は自分の出世に逆らってゲームをしている。われわれがつくり上げようとしている体制が私には気に入らないのだ。私は新しいものを求めて闘う――自分自身で代償を払って。私はポーランドにとっての利益を私自身よりも上に置いている。

――あなたが自分自身の損になるような行動をしていることは私にもわかる。違いは、あなたの言うポーランドの利益なるものが私には利益に思えないということだ。

ワレサ　つまり、至福のやすらぎは善きかな、というわけだ。私はその任に向いていない？　ではなぜそれをやっているのか？　われわれは旧体制のおかげで病んでいる。レーガンは何人の人間を首にした？　われわれは立ち去ることも学ぶべきだ。

――しかしあなたはまだ大統領ではない。

ワレサ　それじゃ、首相は独裁者と呼ばれているのか？　彼は大臣を何人も首にしている。

――それは首相の権限だ。

ワレサ　私には『週刊連帯』についても権利は否定されている。首相にはできるが議長にはできない。地方の連中は好きなとこへ出かけてゆくのに、私は編集長のところにもいけない、こちらに招くのもだめだ。仲間ほめばかり多すぎる！

あやつり人形にはなれない

――市民委員会には権力独占の危険性があるとあなたは言う。グダンスクの委員会は、まったく思いもかけず、県議会の60議席のうち59議席もとってしまった。グダンスクの有名人たち――おまけに「連帯」経験まである――はグダンスクのための同盟に加わった。なぜあなたは自分の縄張りで多元主義のために戦わなかったのか、どうして彼らを支持しなかったのか？

ワレサ　支持はした。委員会の会合で私は、よく思い出してくれ、「連帯」の権力独占はやめてくれ、と言った。しかしグダンスクは助言を認めなかった。人びとは私を信じている、だから「連帯」に投票する、たとえ私がそこで「連帯」に反対しても。しかし、もしよそのことだったら少しは効き目があるはずだ。そうでなければ私は組合をやめる。ただ、そうしたときいちばん喜ぶのはアダム〔ミフニク〕ではないのか？

――われわれの編集部でヘンリク・ヴェツ、それからアダム・ミフニクに対するあなたのやり方について話し合っていた時には誰も喜ばなかった。ワレサ本人との戦いが始まるということでは、高揚もしなかったし、恐怖もなかった。悲しかった、残念だった。多くの人びとが同じような思いでこうした争いを見ているのだと私は思う。あなたのしているゲームを人は理解できないし、不安を引き起こしている。

ワレサ　私は仲間たちとよく話し合いたかった、そっと、社会の人々をやきもきさせないで。いつだって私は譲歩を迫られる。ヴェツとナイデル〔ワレサが市民委員会委員長に指名〕の意見が何1つとして一致しないとなったらどうなる？　ナイデルは任命されなかった、彼らはそう言う。しかし任命権は誰のものだ。ゲレメクではない、たぶん私だろう。私にはヴェツを解任する権利があるのだ。

――それは国民に非常に悪い印象を与えたと思う。これはあなたの私的な問題ではない。

ワレサ　委員会を招集するのは私だ。

――これは公の問題だ。

ワレサ　誰もが招きを受けることができる。だから私はさまざまな人を招集する。

――エルネスト・スカルスキ〔『ガゼタ・ヴィボルチャ』編集メンバー〕が言ったことだが、あなたの言葉を聞いて多くの人びとは両親が離婚した子どもを思い浮かべるそうだ。どちらが悪いか

はもはや重要ではない、ただひたすら悲しく、不安なのだ。

ワレサ　しかしゲレメクとマゾウィエッキの時も私は非民主的にやった。あれでよかったのだ。それが今、私が決定を下せないように、あらゆることがなされている。どうして私を非難するのだ？

――あなたが間違っていると思うからだ。あなたは自分の親しい、献身的な友人たちに正面から攻撃を加えている。闘いの話とか、インテリとか、そのすべての言葉が人の心を傷つけ、不安を呼び起こす不安定要素になる。

ワレサ　ブツク市で私は民主主義の定義を引用した、それは万人の万人に対する闘いというものだ。ヘーニョ〔ヘンリク・ヴェツ〕には3カ月も前から、ナイデルと何1つ相談しないというやり方はやめてくれと頼んでいる。彼は聞く耳を持たなかった。彼を解任せざるをえなかった。私はあやつり人形にはなれなかったし、これからも決してなるつもりはない。

私は市民委員会から手を引きたい、しかし手を引くのは委員会がきちんとした時だ。今まで規約もなしでやって来た。ヘーニョのように地下では有能だった人たちがいる。ところが彼らは今はルールに従わないのだ。彼らは新しい原則に適応していないのだ。そして新しい時代にも。

新聞の第1面

――西側の新聞のあなたの相場は下がっている。『ラ・レプブリカ』の外報部長パオロ・ガルンベルティはこう書いた――「ワレサ、大衆の不満に乗じ、反インテリ十字軍に身を投じる。東欧はすべてを必要としている、ただし例外がある、新しいペロンの輩、エリツィンやワレサのような連中はいらない」。

ワレサ　ずいぶん遠くまで届くアンテナを持っている人がいるものだな。

その新聞にあなたがスウプスクのことを載せてやってくれないか。結局、ストライキを終わらせたのはこのデマゴーグ〔ワレサ〕で、今も、仕事に戻れと言っていると。こんなことはこれからも起きる。ワレサを非難する、それから疑いを晴らす、それからまた、今度は「連帯」を非難する、こんなふうにしてわれわれは新聞の1面にとどまりつづけるのだ。

――労働組合で同時に政府の後方支援基地、偉大なる神話にしてOPZZ〔旧官製労組〕より組合員の少ない組合。独立自治労組「連帯」の経験したアイデンティティの危機を体現する人物、まさにそれがあなただ――組合指導者にして大統領候補、書記と編集長を首にする男。あなたは組合における自分の役割をどう見ているのか？

ワレサ　今が私の最後の任期になる、2期より長くは務めを果たせない。あと1年半、いや、もっと短かったかな……。ノーベル賞受賞者として私は、ラテンアメリカとアフリカでもっと多くの話し合いが行われるよう、力になりたい。

まず最初に私は国内問題をきちんとしなければならない。今のところ成果はあがっていない。〔将来のための〕貧弱な制度的保障があるだけだ。「連帯」は勝った、しかし帽子〔お偉方〕が邪魔になっている。どんな頭にこの帽子がのっているのか――それが問題だ。「連帯」の帽子の下にはいったい誰が隠れているのだ？

〔訳：篠崎　誠一〕

Rys. Jacek Gawłowski

「連帯」市民委員会に何がおこったか

「改革の加速化」をめぐって

Co Zostało z Komitetu
Gazeta Wyborcza, 25 czerwca '90, 26 czerwca '90, Warszawa

【編集部注】 6月24日に開かれた「連帯」議長付属市民委員会の会合で、委員会を二分しての論議が戦わされた。口火を切ったのはレフ・ワレサで、「皆、腹蔵なく意見を言い合おう」と呼びかけ、イエジ・トゥロヴィチ（市民委員会メンバーの1人。カトリック系週刊紙『ティゴドニク・ポフシェフヌィ』編集長）を名指しで批判した。この発言に、委員の一部（特に、メンバーになって日が浅い人々）は熱烈な拍手を送り、「改革の加速化」「共産主義者の即時断罪」などを求めた（ワレサはここ3カ月ほどの間に、自分の考えに近い人々を中心に76人もの新メンバーを任命しており、これも旧来の人々が反発する一因となっている）。これに対し、古くからのメンバー（反体制活動歴の長い人々）の多くは、そのような要求は無意味なデマゴギーだと反論。7時間にわたって「罵り合い」にも近い論争が行われ、そのなかで63名の委員が署名した委員会解散を求める書簡が読み上げられた。会の終わりにワレサは、1カ月後に開かれる次回の会合までは新しい委員を任命しないことを約束するとともに、「これらの問題すべてをよく考えよう。たぶんわれわれはまた一緒にやってゆくことができるだろう」と全員に呼びかけた。

議論は各人の発言が入り乱れて展開されたが、『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙に掲載された主要メンバーの発言要旨からその主なものを訳出し、あわせて、63人の委員の手紙と、『ガゼタ』の解説記事を紹介する。〔訳：高橋初子〕

レフ・ワレサ
腹蔵なく話そう

今日われわれは岐路に立っている。われわれはものごとを前に進めることもできるが、手にした勝利を台無しにしてしまうこともできる。

私は時々、わが国で起きていることが本当にわれわれの望んでいたことなのか疑問に感じる。壁の落書に「共産主義者、戻って来てくれ」とか、何やらのギャング、たぶんユダヤ人が権力を握ってわれわれを苦しめている、と書いてあるのを見ることも増えた。これは反ユダヤ主義ではなく、一部の人が自分の利益ばかり追求して他の人々の利益をないがしろにしていることを指している。ポーランドに反ユダヤ主義が育って来たと見る人もいるだろうが、そういうことではない。

時々私は、これは何かの陰謀ではないかと疑い始めている。もしやマグダレンカ（円卓会議期間中に舞台裏交渉が行われた場所）の中かどこかで作られた？　私はマグダレンカにいたが、私自身はいかなる陰謀にも加わっていない。

私は、われわれの命題すべてを実現しようと努めてきた。そして今、私の先生たち、なかでも私にポーランド性と愛国心の何たるかを教えてくれたトゥロヴィチ氏が、われわれの意図を疑っているという話を耳にするようになった。われわれが国を不安定にし、首相や政府を揺さぶっているという声も聞かれる。どうしてそんなことになったのか？

そこで、私は、ここでお互いに腹の中をさらけ出し合うことを提案する。

おととい、政府報道官が「あの斧を持った改革加速化主義者〔ワレサを指す〕」という表現を使っ

市民委員会議長Z・ナイデル（左）とワレサ

た。諸君、これはスキャンダルだ。

私のことはこのところ、民主主義に対しクーデターをしかけている男として世界に伝えられている。体制が変わると多くの空白部分が生じ、法律も議会もすばやくそれを埋めることができない。私はそこで政府に特別権限を与えることを提案した〔注：政府はこのワレサ提案を「必要ない」と拒否した〕。民主主義を害する幾つかの現象を阻止するために、特別権限付与は必要だった。もしこの権限を用いて社会主義者協同組合システムやＲＳＷ「プラサ」〔旧統一労働者党所有の独占的出版社〕やノメンクラトゥラ企業への対策を講じていれば、どれほどトラブルが少なくてすんだことか。

ここで腹の中の見せ合いをしたならば、その後にはわれわれはポーランドで何が起きているかをより理解しやすくなるだろう。私は最初にトゥロヴィチ氏の発言を求めたい。あなたはマゾヴィエツキ政権を守らねばならないとおっしゃった。私の答えはこうだ――政府は言葉では守られている、しかし行動によっては守られていない。スウプスク〔鉄道スト〕、ムワヴァ〔酪農家スト〕、グダンスク造船所の５回〔のスト〕〔いずれのストにもワレサが乗り出して解決に力を貸した〕。こういった時にあなたはどこにいました？　ムワヴァの農民は牛乳１㍑当たり200ズウォティの値上げを得たが、６月中には全然お金は支払われないと言われた。ここで必要なのは民主主義の教師だ。つまり、われわれはポーランドを建設しているのであり、それは困難を伴う作業だと説明してまわる人々だ。ところが、正しい理屈は装甲車の助けで説明しなければならないと大臣どのが言ったのを私は聞いた。

そんなものは私が建設しようとしているポーランドとは違う。トゥロヴィチさん、ポーランドは今、あなたがワレサと民主主義にどういう不満を持っておいでかを聞きたがっている。

ヴワディスワフ・フラシニュク
（「連帯」下シロンスク地区議長）
専制君主の宮廷を作るのか

この会場の人々が押しつぶされボロ布のように扱われているのを見て、私はそのやり方にショックを受けた。トゥロヴィチ氏を発言を求めて引きずり出すことにどんな意味があるのか？

〔ワレサ発言への〕拍手が恐ろしいものに聞こえ、私は自分がどこに迷い込んだのかいぶかしく思い始めている。われわれはマゾヴィエツキに反対する反対党を結成しようとしているのか？　それとも専制君主の宮廷を？

今現在ポーランドは民主主義の国だ。この市民委員会も下からの、特に郡や地域や県の市民委員会での検証を受けるべきであり、代議制度を作って主体性を確立すべきだ。でなければポーランドを分裂させてしまう。

「連帯」の盾を持ちワレサの口ヒゲをつけて、それでいてすべての者を――「連帯」を、そして「連帯」が提示してきた諸価値を――攻撃しているこの組織〔市民委員会〕とは、いったい何なのか。

私はもう自分がこの団体の一員であると考えることをやめた。今困っているところだ、どうやって抜けたらよいかわからずに。

わが友人レフ・ワレサ氏にもう一言。私が「レフ・ワレサ氏」と敬称付きで言ったのは、私がかつて出獄後に辛酸をともになめたあのレフとこの人物が同じ人間なのか考え込んでしまうからだ。

レフ・ワレサはデマゴギー的な質問を投げかけ

ている。そして労組「連帯」を代表しているのは彼なのだ。おそらく人々を効果的に防衛するのに失敗したのはわれわれであり、ストライキという状況に至るのを許してしまったのもわれわれなのだろう。ワレサはその質問を農民党や「個人農連帯」に向けると良い。何のプログラムも持っていないのはおそらく彼らの方だ。

改革加速化とは何を意味するのか？　皆がマイクを握っては「われわれはレフ・ワレサが大好きだ、だからものごとはもっと良く、もっと早く、もっとたやすく、もっとうまくいくようになる」と言っていることが、どんな意味を持つのか。そんなのは中身のないただの言葉だ。

われわれは民主主義的メカニズムを守っていこう。ノメンクラトゥラを擁護するマゾヴィエツキの肩を持つのか、それともワレサの側につくか、といった図式で対立を生もうとする試みからは、希望のなさという感情しか生まれない。

ポーランドはどうあるべきか。われわれは一生このボルシェビキ的やり方から脱却できないのか。

もしも市民委員会が民主的組織にならなければ、ポーランドにも民主主義は存在しなくなり、命令によって支配する強大なるレフ・ワレサがいるだけになろう。

ズビグニェフ・ブヤク
（ワルシャワ市民委員会連合議長）
委員会の役割は変わった

現在、この委員会の役割は急速に変わりつつある。アレクサンデル・ハルへのワレサの返答の中で、この変化が何であるかが話された。市民委員会はもはやその知恵を議長が利用する形の委員会ではなくなってきている。委員会のなかでは役職をめぐっての競争が生じ始めた。より確固たる支持を表明し、より上手くお追従をいう者がポストを得るチャンスをあてにできる。

これはつまり、委員会への私の参加が終わったということだ。私はかつて共産主義者も警察も恐れなかった。議長、それと同じに私はあなたをも恐れない。

W・フラシニュク（左）

昨年の選挙前にわれわれが、レフ・ワレサとともに撮った写真の問題に戻って考えたい。私自身は彼と一緒の写真を撮らなかったので、この問題をいくらか距離を置いて見ることができる。国王や皇帝や首相といえども、あなたほど多くの著名人と一緒にあれほどたくさんの写真におさまった人物はほとんどいないだろう。あなたはそれらの人々に何かを与えたわけだが、彼らもまたあなたに何かを与えたのだ。あなたはそれらの人々と相互信頼を結び合った。それはポーランドの利益となった。

あなたは政治的活性化を提案した。その意図は良かった。しかし結果は有害だった。何ひとつ新しいプログラムは生まれず、将来の政府や議会でのポストをめぐる争いが活性化されてしまった。これはポーランドにとって有害だ。

この会場で、〔政府と議会の行った〕旧党所有の独占的出版社の解体方法は不適切だったということが何度も指摘された。ところがそれと同時に、独占者から取り上げたその諸新聞を他の様々な政治グループに分配し、新しい様々なイデオロギーやイデオローグに従属する新聞を作ろうとする提案も出された。私はこの考えが気に入らない。

議長、あなたは、私がこの委員会内でしていることは生きている有機体に対する犯罪だと言われた。私はその批判を、委員会をやめろという申し入れと受けとめている。私は辞めよう。しかし、

あなたの言う生きている有機体とはポーランド社会を指していると思うが、それに対する犯罪は国家への犯罪にも等しい。そんな犯罪を犯した者は絞首刑になるものだ。

あなたはきっと勝つだろう。だから私はひとつだけお願いする。善良で民主主義への愛に溢れたあなたが、いずれ私に「死刑囚の最後の一言」を言う機会を与えて下さるようにと。

ヤロスワフ・カチンスキ
（上院議員、『週刊連帯』編集長）

2つの利益の対立

ヘンリク・ヴエツの発言〔ワレサとナイデル（市民委員会議長）が次々と多数の新委員を独断的に任命しているのは非民主主義的だという内容〕があったので、言わせてもらいたい。「連帯」議長付属市民委員会はこれまで常に一定の原則で組織されてきた。それは、ワレサが任命するという原則だ。

「改革加速化」の支持者たちは、社会不安や迫りくる危険な状況の原因は、幾人かの政治家の間の協力関係に、あるいは協力の欠如に、問題があるためではなく、全く別の原因があると考えている。2つの相対立する利害を同時に満足させることなど不可能だという点をしっかり理解しなければならない。2つの利害とは、民主的体制と市場経済の建設をめざしている社会の大多数の利害と、古いノメンクラトゥラの利害とだ。

しかしもうひとつ問題がある。経済状況を背景とする紛争の危険だ。鉄道ストや農村での騒ぎ、様々な経済部門での緊張の高まりの原因については、いくつもの理論を考えだすことができよう。しかし、これらの現象が劇的な経済状況の結果であるという人々の非難は、聞き流してすませられるものではない。この問題を論じることはいくらでもできようが、論じたからといって急速に人々の支持が得られることまずありえない。従って、これに対しては社会生活の中の何か別の要素、社会の必要としているものをある程度満たし、社会的緊張を緩和する要素を探さなければならない。そのためには政治状況を明確化させ、マゾヴィエツキ首相—ヤルゼルスキ大統領の2人に象徴される混成軍的な権力構造を廃すべきである。

H・ヴエツ（中央）、Z・ブヤク（左）、A・ミフニク（右）

© Janusz Szczepanski

また、社会の抱いている大きな不公平感に関連した問題もある。われわれはベルトをきつく締めなければならないのに、旧ノメンクラトゥラの連中は結構な暮らしぶりだ。こうしたことから生まれる道徳感上の混乱はすでに現在危険なものとなってきており、将来的にも危険である。なぜなら、それが原因で社会の中に民主主義に無関心な人々のグループが生まれるからだ。そしてそのグループから人民主義者（ポピュリスト）や反民主主義運動が出てくることは20世紀の経験が証明している。共産主義しかり、スペインのアナーキズム、ペロン主義、ナチズムしかり。われわれが今ポーランドに招きつつあるのはまさにそんな状況なのだ。そんな政策を支持することができようか。

さらにもうひとつ。ハル大臣〔アレクサンデル・ハル議会外野党対策無任所相。市民委員会メンバー、元「連帯」活動家〕はさきほど「自分は勇気ある人間だ」と述べたうえで、「レフ・ワレサは大統領に適任ではないと思う」と発言した。私もそれにならって市民的勇気をもって言おう。私はタデウシュ・マゾヴィエツキの功績を評価するし、首相としての彼を支持するが、彼もまた大統領には適任ではないと思う。

アンジェイ・ヴィエロヴィエイスキ（上院副議長）ワレサは重大な誤りを犯した

この数カ月に彼〔ワレサ〕は重大な誤りを犯したと言わざるを得ない。それらは非常に危険な誤りであり、そのため世間の不安が急速に高まった。これは誰かと誰かが言い争うという問題ではなく、ポーランド社会の平衡にかかわる問題だ。

これまでの10カ月間にわれわれがこの国で何事かをなしとげてこれたのは、なにゆえか？　それは社会の大部分が、国は新しい道徳律、新しい原則、新しい精神に従って変化しつつあると信じたからであり、また人々が国民の前に道徳的権威として現れた人々〔指導者たち〕は一致協力して行動していると確信していたからだ。

それによって新しい道徳上の雰囲気が生まれ、人々に希望や目的意識を与えた。ところがこうした感情が深刻な打撃をこうむった。

Rys. Ludomir Slupeczański

将来への不安、経済の失敗、困難、危機や改革という条件下でのひたすら忍耐――これらは予想されたことだった。それは、社会構造の中の改革が実現された部分を揺さぶった。われわれはそれに対して支払いをせねばならない。

レフ・ワレサが始めた新しい政治運動の基本的前提条件は重要かつ必要なものだが、最重要なものではない。国を効果的に再建し、ポーランド経済に何らかの変化が生じたという証明を目にしたいという人々の願いに比べれば、複数政党主義や新しい関係の樹立などは――将来的には有益で好ましいものであれ――現在は重要性の低い問題なのだ。

市民委員会が効果的であるためには、２つの原則に立脚していなければならない。ひとつは、様々な社会勢力の代表として選ばれた人々の集まりであること、もうひとつはその勢力の配分や招聘はレフ・ワレサの任務であり、ただし協議の上でこれを行うべきこと。この２つの条件が満たされなければ、世に必要とされているオピニオン・メーカー組織＝市民委員会たることはできないだろう。

そして最後の問題。各地の市民委員会運動はいかにあるべきか？　現在の闘争の焦点となっているのはそれらの市民委員会であり、その精神、路線、参加者である。それらの運動はここにいるわ

れわれとは少し違う。それらは民主主義的基盤を持った運動であり、それゆえに幅広い人々の支持を得て2度の選挙に勝つことができた。

地方の市民委員会はクラブでも会合の場でもなく、活動の場だ。彼らはその形式を拡大する必要はない。いずれにせよ彼ら自身で決めることだ。

マゾヴィエツキとバルツェロヴィチの政府にとって、そして政府によって実現された改革にとって、各地の市民委員会運動は現時点で唯一の実在する支持基盤であり、国の将来にとって絶対必要なものである。

市民委員会解散を求める63人の手紙

List 63 członków Komitetu Obywatelskiego

親愛なる〔ワレサ〕議長！

独立自治労組「連帯」議長付属市民委員会は歴史を持っています。われわれはできる限りの力を尽くしてあなたと協力し、「連帯」の再合法化、わが国の社会の熱望と課題の定式化、政府との交渉の準備、選挙戦などを行ってきました。

われわれの協力は、相互の尊敬と信頼に基づいてなされてきました。しかしわれわれは今、わが市民委員会の人事の任免に関するあなたの最近の諸決定はこの原則に反している、と言わざるを得ません。

われわれは、独立自治労組議長付属市民委員会はその任務を果たし終え、もはや活動を続ける必要はなくなったと考えます。われわれの発意により地方の社会的・政治的イニシアティブを組織して作られた各地の市民委員会運動は、それぞれの組織的必要性や存在のあり方について自ら決めることができます。

議長殿、われわれはこれまで協力し合った年月について、あなたに感謝の意を表したいと思います。そして、民主的な独立したポーランドのためになら〔あなたと〕共同行動を取る用意があることも、はっきりと申し上げておきます。

ヤヌシュ・ベクシャク
ヤツェク・ボヘンスキ
ハリナ・ボルトノフスカ
ステファン・ブラトコフスキ
リシャルド・ブガイ
ズビグニェフ・ブヤク
アンジェイ・ツェリンスキ
パヴェウ・チャルトルイスキ
カジミェシュ・ジェヴァノフスキ
マレク・エデルマン
ヴワディスワフ・フィンデイセン
ヴワディスワフ・フラシニュク
ブロニスワフ・ゲレメク
スタニスワヴァ・グラブスカ
アンジェイ・グライェフスキ
ヤヌシュ・グジェラク
ユリア・ハルトヴィク
グスタフ・ホロウベク
ヤニナ・ヤンコフスカ
ヘンリク・ヤンコフスキ神父
ツェザリ・ユゼフィアク
ダミアン・カルバルチク
イエジ・クウォチョフスキ
ヤン・コフマン
マヤ・コモロフスカ
クシシュトフ・コズウォフスキ
マチェイ・コズウォフスキ
マルチン・クルル
ヴィクトル・クレルスキ
ゾフィア・クラトフスカ
ヤツェク・クーロン
バルバラ・ラブダ

ヤン・ユゼフ・リプスキ
ヤン・リティンスキ
アンジェイ・ワピツキ
ヘレナ・ウチヴォ
アダム・ミフニク
アルトゥル・ミェンジジェツキ
ヤン・ムイジェル
アレクサンデル・パシンスキ
アンジェイ・ポトツキ
マリア・ラドムスカ
ヤン・ロスネル
ヘンリク・サムソノヴィチ
ジグムント・スクジスキ
グラジナ・スタニシェフスカ
ステファン・スタルチェフスキ
アントニ・スタヴィコフスキ
スタニスワフ・ストンマ
アンジェイ・シュチェプコフスキ
クシシュトフ・シリヴィンスキ
ヴィトルド・チシェチャコフスキ
イエジ・トゥロヴィチ
アンジェイ・ワイダ
アンジェイ・ヴィエロヴィエイスキ
ヴィクトル・ヴォロシルスキ
ヤツェク・ヴォジニァコフスキ
ヘンリク・ヴエツ
クリスティナ・ザフファトヴィチ＝ワイダ
ヤニナ・ザクシェフスカ
イエジ・ズドラダ
タデウシュ・ジェリンスキ

〔『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙には「署名者リストは国営ＰＡＰ通信による」とある。62人分しか名前がないが、残る１人が誰かは不祥〕

市民委員会は崩壊したのか

『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙の解説

ピョトル・パツェヴィチ

Komentarz : Piotr Pacewicz

〔ワレサの発言に対する〕発言者たちの最初の反応は不快感の表明であり、幾人かは〔ワレサの〕政治的やり方が乱暴だという点を問題にした。会合での最大の事件は、63名の委員の署名した手紙が読み上げられたことであった。その63人の大部分は「連帯」の最も名の知られた権威ある人々、1987年５月に「レフ・ワレサに招かれて」集まった（「市民委員会」の名になったのは88年12月）活動家、顧問、知識人たちである。この手紙は、６月１日に市民委員会書記だったヘンリク・ヴエツ（ＫＯＲ時代からの反体制知識人）が突如ワレサから解任通告を受けたのをきっかけに作成され、署名が募られた。署名者の中には、ワレサの専横的な政治手法（委員会人事を勝手に決めるなど）への倫理的抗議のつもりで名を連ねた人々もいたが、それ以外に多くの人々にとって、この手紙は、市民委員会を「ワレサ大統領」選出への上台にしようとしたワレサのやり方への反対意思の表明であった。ワレサはここのところ市民委員会に新委員を多数入れたが、そのほとんどはワレサの主張する「改革加速化」に賛成する政党活動家タイプの人々だったのである。また、署名者には、市民委員会解散要求を新しい組織――各地の市民委員会運動の代表者と知識人顧問からなるもの――の創設構想と結びつけて考える人々もいた。

この手紙の文面そのものは、市民委員会の解散を求めている。何人かの発言者（フラシニュク、ブヤク、ボルトノフスカ、プラトコフスキ）は、単純に自分は委員会を辞める、と述べた。

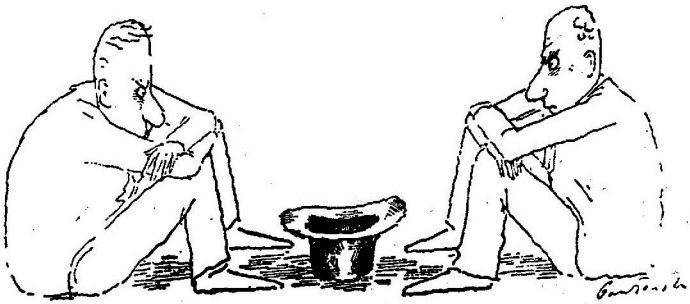
手紙が読み上げられた後――その時点では議場内の人数は相当に減っており、手紙署名者の多くがその場を去っていた――数点が決められた。ま

ず、ヴエツの書記辞任願いが賛成多数で受理され、次回の会合までは市民委員会のナイデル議長が運営を司り、新書記を任命することになった。次に、その間に法律専門家グループが新メンバーの加入原則と委員会指導部選出方法をはっきりと規定すべく検討を行い、それがすむまでワレサとナイデルは新しいメンバーを任命しないことが決まった。

しかしこの決議がどこまで有効なのか、判断し難いものがある。新任のメンバーたちも票決に加わったのか、また彼らにその権利があるのか？ 委員会解散を提案した人々が、なお委員会決議に参加することは可能だったのか？ 定足数は足りていたのか（おそらく定足数には足りていなかったと思われるが、その点はよくわからない。なぜなら、賛成者以外の人数が数えられていないからである）？ しかも、市民委員会はまったく規約を持っておらず、また今回の会合自体そもそも民主主義的手続から少々はずれていたため、上記の疑問には答えの出ようがないのである。

そのため、ワレサの「それでもわれわれは一緒にやっていこう」というアピールやクーロンとヴイチツキによる調停の試みが果たしてどれほど実効性のあるものか、「連帯」に多大な貢献をした市民委員会という組織の崩壊を惜しむ感情の表明以上のものであるのかどうか、よくわからないのが実情である。ワレサが「一緒にやっていこう」と呼びかけた相手の大部分は、その時もう議場にいなかった。ワレサは最後に、「もう一度全メンバーで集まって話そう」といったが、これもどうなるかは不明である。

次回の市民委員会会合には63人の署名者は現れるだろうか？ 手紙の内容や今回の会合のなりゆきからして、おそらく現れないだろう。差し当たり、6月30日と7月1日に予定されている各県市民委員会代表者全国会議が重要な意味を持つことになる。



Rys. Jacek Gawlowski

「カティンの森」日本公開に向けて

ポーランド文化センター　兼岡敏二

昨年のグダンスク映画祭に企画番外で出品されたドキュメンタリー「ワイダ」とその監督アンジェイ・ブジョゾフスキ氏を日本に……という提案がフリーのジャーナリスト今井一氏からあったのは、4月の半ばだった。ピース・イン・ツアーの木村元彦氏と私の3者が共同でこの仕事にとり組むことに決めた。

早速、ゴールデンウィークにワルシャワ入りした私は、A・ブジョゾフスキ氏にお会いした。氏はあの名作「パサジェルカ」（A・ムンク監督。製作中に事故死）の編集をされたとのこと。含蓄の深い彼の話術に魅せられてしまった。

翌日、WFD（記録映画撮影所）で数本のドキュメンタリーを観せてもらったが、その中に何と「カティンの森」が入っているではないか！

「カティンの森」は、発案A・ワイダ氏、総監督M・ウォジンスキ氏。A・ブジョゾフスキ監督も一部担当とのこと（この3氏はいずれも「カティンの森」事件で父親を亡くしている）。映画は、スモレンスクに向かう列車の中で、犠牲者の遺児達の証言シーン、「カティンの森」近くの村人に「私の父の最後をぜひ教えて欲しい」と尋ね回るシーン、生き残った元軍人の「この部屋で……」と証言するシーン、ロンドン亡命政府系の人々が、真相を明らかにしようとしてチャーチルやルーズベルトに働きかけながらも、国際政治力学のはざまで押しつぶされた過程を証言するシーンなどから構成されている。

この全編を貫く怒りと悲しみの深さゆえに、ゴルバチョフの謝罪をひき出すきっかけとなりえたのであろう。経済的な困難さ、政治的圧力にも屈せず、完成にこぎつけたポーランド映画人に脱帽して、ドキュメンタリー「カティンの森」とA・ブジョゾフスキ氏を日本に迎えたいと思った。

幸い、日本映像記録センターが同氏招聘と「ワイダ」および「カティンの森」日本公開をひき受けて下さり、今夏実現の運びとなった。より多くの方の参加をお願い申し上げます。

「カティンの森」「ワイダ」上映会のご案内

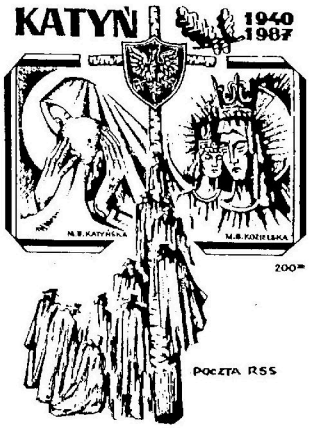
日時：8月10日（金）～22日（水）
午後4時、午後6時

場所：有楽町そごうデパート8階
映像カルチャーホール

料金：500円

なお、8月10日は、アンジェイ・ブジョゾフスキ監督の講演があります。

問い合わせ先：
ピース・イン・ツアー　電話：03-207-3690



【2頁から続く】
道関係の諸問題の山積を招いた運輸行政を批判。

6月1日　ワレサ、テレックスを市民委員会書記ヘンリク・ヴェツに送り、書記解任を通告。●司法省、ポピエウシコ神父殺害事件に公安上層部の関与がなかったかについて再調査を開始。●1795年以来初のモスク（イスラム寺院）がグダンスクに設けられる。

6月4日　ワレサは公式声明を発表、市民委員会の役割の明確化と機能の強化が必要と述べる。また、同委員会基金の運営と資金分配の責任者が同一人物なのはおかしいのでヴェツを書記から解任すると発表。●ワレサ、『ガゼタ・ヴィボルチャ』編集長のA・ミフニクに手紙を送り、編集長辞任と「連帯」ロゴマーク使用中止を要求（本誌7月号参照）。●ポーランド、オランダ両国は相互通常兵力査察の実施に合意、両国国防相がワルシャワで覚書に調印。

6月5日　ヴェツ、彼を解任したワレサのやり方に驚愕したと声明。●ウッチ地区「連帯」、鉄道ストに対する「連帯」全国委の対応を批判し、ストの原因は未解決と指摘。

6月6日　クーロン労相とヴィエラデク運輸相、鉄道労組代表と会談。●政府は今年初めからの5カ月で市場経済への移行を完了したと発表。

6月7日　ワルシャワ地裁、規約が現行法のスト権条項に反するとして、反ワレサ路線の労組「連帯80」の登録を14日間延期。同労組副議長S・ヤヴォルスキ、規約変更の意思はないと述べる。一方ワレサ委員長は、「連帯」の名を使えるのは自分の組合と「農民連帯」だけだと発言。●世論調査（5月17～23日実施）の結果によれば、マゾヴィエツキ政権支持率は62%、不支持19%。ワレサとマゾヴィエツキの対立では、37%が首相支持、11%がワレサ支持、33%がどちらでもなし。●ワルシャワ条約機構首脳会議、同機構の「民主主義の原理に基づく国家連合」への再編をうたった政治宣言を採択。

6月8日　中央統計局によれば5月の工業生産は前年同月比27%減。

6月10日　『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』誌編集長J・トゥロヴィチの呼びかけで約60名の知識人・活動家がクラクフで会合、マゾヴィエツキ政権の政治的基盤作りを目的として「市民同盟」を結成。ワレサが大統領就任を目指して「中央同盟」を作ったことへの一つの反応だと参加者の一人Z・ブヤクは語る。

6月11日　EC投資銀行、ポーランドへの最初の貸し付けを承認。

6月12日　ポーランド・ラジオによれば、ソ連邦ハリコフ市郊外の公園に、第2次大戦中ソ連内務人民委員部（NKVD）に殺害された約3900人のポーランド将校の遺体が埋められていることが判明する。●鉄道労働者の各労組、鉄道当局からの月額18万ズウォティ賃上げ回答を受諾。

6月13日　欧州自由貿易連合（EFTA）、ポーランド、ハンガリー、チェコスロヴァキア3国との経済協力協定を締結。

6月16日　ムワワァの酪農農民、ワレサとの話し合いの後に道路・工場封鎖を中止。しかし牛乳生産に関する条件改善が示されねば7月3日に抗議を再開の方針。

6月17日　市民委員会が会合。ワレサは出席せず、「ポーランドの新しい政治システムの早急な確立」を求める声明が代読された。マゾヴィエツキ首相は、改革加速化を旗印に他派を攻撃したり憎んだりするのは誤りだと述べ、政策実現のための政治基盤として全国市民委員会連合の創設を求める。この問題の討議のため、7月1日に各地市民委員会代表者会議を開くことに。

6月18日　7月1日からガス、暖房、給湯代が2倍、電気80%、郵便60%値上げの予定。●公式統計による5月末の失業者は44万3000人。

6月19日　第2次大戦中1万5000人に上るポーランド将校がソ連当局に虐殺された事件で、カティン、ハリコフに次ぎ第3の大量死体埋葬地がモスクワ北部カリーニン市郊外のミエドノイエで発見される。

6月20日　ワレサ委員長とZ・ナイデル市民委員会議長、6月17日の市民委員会の議事手続を不満として、6月30日に各地市民委員会代表者会議を招集。●市民議会クラブ議長B・ゲレメク、農村問題を媒介にワレサとポーランド農民党（旧統一農民党）が接近していることは「理解しがたい」と述べる。

〔訳編：高橋初子〕

編　集　後　記

☆「連帯」の分裂、ワレサ委員長とマゾヴィエツキ首相の対立、といった話が伝えられます。対立の構造はいまひとつよくわかりませんが、新しい情勢の下で、新しい政治的分岐が発展しつつあることだけは確かなようです。

☆8月いっぱい夏休みをいただき、次号は9月末刊の予定。　1990年7月25日（み）

ポーランド月報・九九〇年八／九月号（通巻二〇一／二〇二号）一九九〇年九月五日発行（毎月一回五日発行）
九八四年一月一〇日第三種郵便物認可

ユーモア館

競争の時代がやって来たんだ。君たちの
うち相手を殺して生き残った方を主任にしよう。

発行所・ポーランド資料センター
Center for Polish Research
〒177　東京都練馬区下石神井6－35－7
電話　03－904－0427　郵便振替　東京　2－81069
6－35－7　Shimo－Shakujii, Nerima－ku, Tokyo 177　JAPAN
定価400円・年間定期購読料4600円（送料共）